

北タイ班B

狩猟採集民ムラブリと農耕民モンとの歴史的関係
池谷和信（国立民族学博物館）

キーワード：ムラブリ、狩猟採集民、農耕民、民族間関係、モン
調査期間・場所：2004年11月7日～17日、ナン県およびパヤオ県

Historical Relationship between Hunter-gatherer Mlabri and Farmer Hmong

Kazunobu Ikeya(National Museum of Ethnology)

Keyword : Mlabri, hunter-gatherer, farmer, ethnic relationship, Hmong
Research Period, Site :7 ~ 17 November 2004 ,Nan and Phayao Province

1 はじめに

(1) 目的と方法

狩猟採集民と農耕民との関係をめぐる人類学的研究では、農耕民の畑の手伝いをする代償に狩猟民が農作物を入手したり、狩猟民が獲得した肉を農耕民に販売するなど、両者の社会経済的関係が注目されてきた。

その一方で、タイ北部の狩猟採集民ムラブリをめぐっては、Seidenfaden(1926)、Bernatzik(1938) Velder(1963)、Pookajorn(1985)、Trier(1986)、Vongvipak(1992)などの人類学的・民族考古学的研究が蓄積されてきた。そこでは、ムラブリはモンゴロイド系の狩猟採集民として現存しているわずかな例であり、弓矢も吹き矢も知らずに槍を用いるなどの研究の価値ある点が指摘されてきた（大林1968）。またムラブリは、メオ、ヤオ、カムーなどとの間に交易関係があり、森林産物と米、タバコ、塩、衣服、ナイフなどと交換しているという（田辺1987：763）。さらに最近では、狩猟採集民ムラブリを対象にした集団遺伝学の研究から、彼らは決して農耕以前の生活を示しているわけではなく、およそ500～800年前に農耕民から移行して生まれたとされた（Oota et al. 2005）。

そこで本研究では、以上のような動向をふまえて、狩猟採集民ムラブリと焼畑農耕民モンとの関係を歴史的に把握することを目的とする。筆者は、ムラブリに関わる既存の文献を収集することから先行研究の整理をすすめる一方で、北タイのムラブリの村（2003年10月、2004年11月）での現地調査を実施した。なお、本稿では、各時代のムラブリとモンとの関係を文献から抜き出しているが、常に同一のムラブリ集団を対象にして、その関係の変化をみているわけではない。この地域における両者の関係の歴史の変遷を概観することがねらいである。

(2) 調査地の概観

ムラブリは、Phi Tong Luang（“The Spirits of the Yellow Leaves”黄色い葉の精霊を意味）、Khon Pa（森の民）、Mrabri（森の民）、Yumbriなどと呼ばれる。彼らは、タイ北部のナン県やプレー県からラオスのサイヤブリ県にかけて広く暮らしてきたが、政府の福祉政策の影響を受けて現在では定住集落に集まっている。

ムラブリの人口の推移をみてみよう。1976年には約25家族で8バンド、1982年には1バンド当たり15人からなり約140人（Trier1986: 7）、1990年には約200人（Rischel 1995）、2003年には約270人（池谷2004: 25）のようにムラブリの人口は増加している。

2 遊動から定住への地域生態史

筆者は、狩猟採集民ムラブリと農耕民モンとの関係のあり方の違いに注目して、過去80年を3期に区分する。

(1) 1期 (1919-1980年) : 「移動ムラブリと移動農耕民」

ムラブリは、第2次世界大戦以前に、ラオスからメコン川を越えてきたというが、それを示す十分な証拠はない。しかし、ナンを中心として王国が形成されていた時期には、ムラブリはナンの諸王の臣下であり、毎年蜂蜜、藤、蠟を貢物として納めていたと仏教僧が記録した文書が存在しており、当時の彼らの人口は非常に多かったという。(Bernatzik1938)

20世紀の初めになると様々なムラブリ(コン・パ)集団は、カム、ティン、ラフなどの山地民との結合を維持していた。しかし、モンの移住に伴い、両者の接触が他の山地民のそれより数多くなったという。(Seidenfaden1926) 当時のムラブリの生活のようすは、オーストリアの民族学者ベルナツィークの民族誌に詳しい(Bernatzik1938)。

彼らは、竹の密林の中に住んでいたという。また、ムラブリのあるものたちは、彼らの隣人たちと物々交換によって米を得ようとしていた。時には、モン(ミャオ)がこの森の放浪者たちに収穫時の畑で彼らの手伝いをさせ、彼らに食糧を与えることもあった。タバコは大量にそれを栽培している山岳民族、特にモン(ミャオ)から物々交換によって手に入れる。

1970年代の初頭においても、ムラブリは森林に暮らす狩猟採集民であった。ムラブリの男性が、時々、他の山地民と接触をして、ハチミツや薬用の根茎類と服、塩、タバコ、鉄類などを交換していたが、女性と子供が接触することはなかった。しかし1976年頃には、ムラブリは、モンの村人のための規則的な仕事を始めた。モンの焼畑地での陸稲栽培のための森林伐採である。

(2) 2期 (1980-1998年) 「移動ムラブリと定住農耕民との関係」

1969-70年に、11のモンの家族が定着したあとに、1973年には、木材会社がサー地域の伐採権を獲得したために、木材の伐採がムラブリの生活域にも及んできた。例えば、Huay村とBow Hoy村でのムラブリとモンとの関係では、ムラブリは農耕の方法を教えられ、モンはその労働の代価として服や薬を与えた。またモンは、アルミ製のポットや川の水を運ぶバケツなどをムラブリに貸したりした。(Vongvipak1992:99)

この時代になると、農耕民のあいだでは定住化がすすみ、ムラブリもまた農村の近くで長期間にわたって滞在するようになった。1982年のDoi Phu Kengでは30日間、Doi Luangでは18日間に及ぶ(Pookajorn1985)。具体的には、すべてのムラブリ家族は、モンの焼畑農耕のために一年の多くは雇われるようになる。しかし、その仕事がないときには、深い森の中を移動している。彼らの主食は、モンから得られた米に依存するようになる。

この時代には、ムラブリが依存していた森林資源が急激に消えていくことになった。彼らのなかには、「森林が消えると精霊に罰せられる」という意識を持つ人もみられる。

(2) 3期 (1998-2004年) 「定住ムラブリと定住農耕民」

ムラブリが暮らす新しい村の建設に関しては多くの論議を呼んだけれど、結局は1998年にナン県の西部にホイユワンHauy Ywauk村がつくられる。その後2000年にはムラブリに国籍が与えられたことで、ムラブリへの関心が高まる。このナン県のムラブリの村では観光が盛んになり、その道具化しつつあり、世俗の波に翻弄される姿が痛ましいという。(坂本2001)

筆者の調査によると、ムラブリで自らの陸稲をつくっている家族が、2003年10月の2家族から2004年11月の5家族に増加していることがわかる。また、ムラブリがモンの畑仕事の手伝いをすると1日に50バーツ(約1500円)のお金や食糧が与えられることになっている。さらに、モンは、都市に存在する旅行会社とムラブリとの仲介をしており、ムラブリの採集などの生業が観光客用のパフォーマンスとして新たに脚光を浴びることになる。

以上のように、タイ北部におけるムラブリとモンとの関係の特性を3つの時代(1期、2期、3期)に区分することを通して、両者の関係の歴史の変遷を説明することができる。

3 過去80年間のムラブリ・モン関係

本稿では、既存の文献の整理と現地調査を組み合わせることで、狩猟採集民ムラブリと農耕民モンとの歴史的

関係を把握することを目的とした。

その結果、以下のようなことが明らかになった。まず、過去80年あまりにおける両者の関係の変遷は、3つの時代に分けて考えることができる。両者とも移動生活を行っていた1期、モンの定住集落と関係する2期、両者とも定住する3期である。

1期は、ムラブリの蜂蜜や根茎類とモンのタバコや塩などが交換される交易関係がみられた。この時代の両者とも、移動生活であるために、特定の関係が継続するとは限らなかった。当時のムラブリは、竹の密林の中に住んでいる。そこには、彼らの生活の糧である根茎類、果実類、植物類が多いからである。(Bernatzik1938)この点からも、森林資源に深く依存したムラブリは、両者のあいだの共生関係を維持していたとみなすことができる。

2期は、森林伐採などの環境変化のもと、モンの定住集落での長期にわたる農耕の手伝いのみられる時代である。そこでは焼畑での森林伐採、雑草の除去、収穫期の手伝いなど多彩なものが行われた。ムラブリの主食が米になっていることから、近隣社会との共存なしではムラブリは生存できなくなっている。

3期は、ムラブリが自らの畑で農耕に従事する時期である。これまでは、農耕をまったく試みなかったムラブリの一部がトウモロコシの栽培を始めている。また、この時期におけるムラブリによる農耕民の手伝いに対しては、日当が支払われている。

以上のように、ムラブリとモンとの関係の歴史的推移から、熱帯モンスーン林をめぐる狩猟採集民と焼畑農耕民との関係は、交易から労働委託、観光をめぐる仲介者とパーフォーマーなどの多様な形を認めることができた。かつてムラブリの若者が、モンの放った火で焼かれる山肌をみて、「山を荒らしている」となげいたというが(坂本2001)、モンはムラブリの暮らしをどのように見たのであろうか。両者のあいだの社会経済的関係のみならず、お互いの他者認識の変遷などの把握は、今後の課題として残されている。

参考文献

- 池谷和信 2004「タイ北部におけるムラブリの資源利用をめぐる初期的報告」『総合地球環境学研究所 研究プロジェクト 4-2 2003年度報告書 アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005』pp.25-27.
- 大林太良 1968「解題」ベルナツィーク 1968『黄色い葉の精霊—インドシナ山岳民族誌』大林太良訳。平凡社。
- 坂本比奈子 2001「ムラブリ族の現状と未来」講演要旨。
- 田辺繁治 1987「ムラブリ」石川ほか編『文化人類学事典』弘文堂。763頁。
- Bernatzik,H.(1938)Die Geister des gelbe Blattern. Munchen:Bruckmann. ベルナツィーク 1968『黄色い葉の精霊—インドシナ山岳民族誌』大林太良訳。平凡社。
- Oota et al. 2005 Recent origin and cultural reversion of a hunter-gatherer group.PLoS Biology 3(3):536-542.
- Pookajorn S.(1985)Ethnoarchaeology with the Phi Tong Luang(Mlabri):forest hunters of northern Thailand. World Archaeology 17(2):206-221.
- Seidenfaden(1926)Tha Kha Tong Lu' ang. Journal of the Siam Society 20(1):41-48.
- Trier,J.(1986)The Mlabri people on northern Thailand. Contributions to Southeast Asian Ethnography 5:3-41. Walker,A. ed.1992 The Highland and Heritage. Singapore:Suvarnabhumi Books に再録。
- Vongvipak(1992)Economic and social change among the Mlabri. Pookajorn,S. eds.The Phi Tong Luang(Mlabri). Bangkok: Pdeon Store.pp.92-103.